

## 古代日本海沿岸地域における海人の考古学的研究

大庭 孝夫

### はじめに

日本海沿岸地域の中央を占める北陸地域は、東北南部、中部高地、畿内北部と陸で接し、かつ日本海を通じて北海道から九州まで至る、人、モノ、技術、情報等の交流において重要な役割を果たしてきた。特に弥生時代、北陸～山陰地域にかけて、ヒスイや碧玉の玉生産技術、木製品、鉄器、四隅突出型墳丘墓などで緊密な関係性が認められることが、数多くの先行研究から示されている。

北陸～山陰地域の遺跡で出土する漁業用の石錘で、水滴形ないしは紡錘形で、緊縛用の孔・溝を有する有孔・有溝石錘は、弥生～古墳時代前期、北部九州の玄界灘沿岸地域を中心に分布する九州型石錘と形態が類似する。そのため、九州型石錘を提唱した下條信行氏は、この石錘（「九州型石錘」）を日本海における古代玄界灘海人の活動範囲を示す根拠資料とするなど（下條 1984・1989 他）、日本海沿岸地域と九州との広域的な地域間交流を具体的に示す資料として取り上げられてきた。

近年、北陸地域出土の「九州型石錘」については、内田律雄氏（内田 2016）、久田正弘氏（久田 2020）、次山淳氏（次山 2022）により基礎的な整理が行われ、内田・次山両氏は玄界灘沿岸地域の九州型石錘とは材質、大きさ、年代の開きなど、その関係性についての問題点を指摘している。

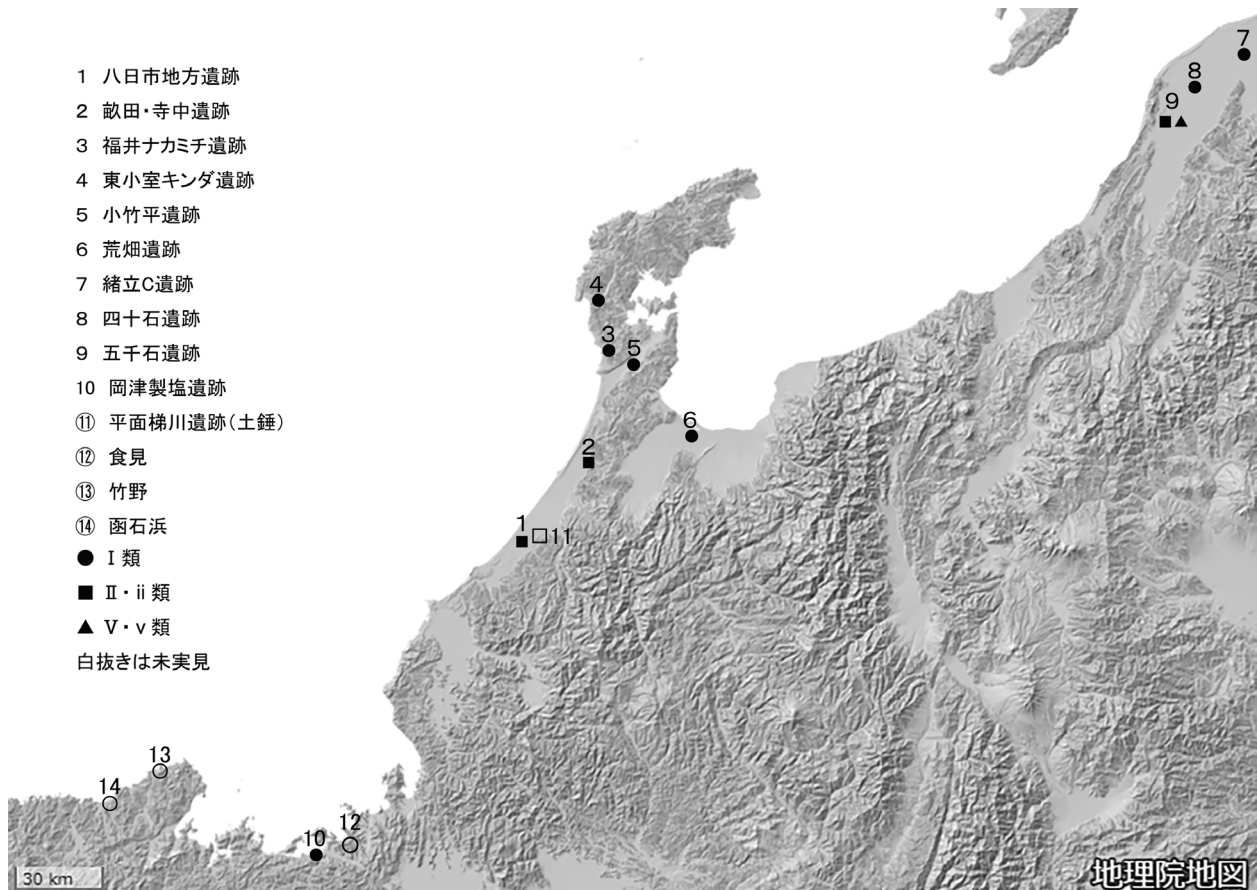
筆者は、玄界灘沿岸地域における弥生～古墳時代前期の九州型石錘について検討を行ってきたが（大庭 2023）、そのうち筆者分類 I 類（第 2 図 1～9）について、形態、色調、使用痕跡、分布及び民俗例から、先行研究の諸説よりも具体的な復元に踏み込み、イカ釣具の錘として使用された可能性を示した（大庭 2021）。さらに捕獲したイカの加工、流通について、佐渡島の民俗例を踏まえ、本格的な土器製塩導入以前という時代背景や地域社会との関連性まで仮説として提示している。

今回、筆者が取り組んできた玄界灘沿岸地域の九州型石錘の観察結果に基づき、北陸地域出土の「九州型石錘」の資料調査を行い、製作技法や使用痕跡、石材、法量、年代観等の考古学的な基礎情報を改めて整理することで、玄界灘沿岸地域の九州型石錘との関連性を検討する。その上で、北陸地域における「九州型石錘」の成立過程、変遷、その背景について可能な限り掘り下げてたい。

### 1 研究史

北陸地域の「九州型石錘」に係る研究史については、次山淳氏が詳細な整理を行い（次山 2022）、北陸地域の「九州型石錘」研究の問題点を明らかにしている。次山氏は、北陸地域出土の「九州型石錘」は、共伴資料からの年代は古墳時代後期以降のものが多いが、玄界灘沿岸地域における九州型石錘の年代観を念頭に、出土遺構の時期とは離れた理解がされることも多かったとする。そのため、玄界灘沿岸地域の九州型石錘との関係が形成された時期については、再検討が必要とする。また北陸地域の「九州型石錘」は、概して大きく、石材は滑石ではなく、砂岩や凝灰岩が主体であることが玄界灘沿岸地域の九州型石錘との違いであるとした。

内田律雄氏は、日本海沿岸地域の I 類石錘は、いずれも古墳時代～近世に属し、確実に弥生時 1



第1図 北陸地域「九州型石錘」分布図（縮尺任意）（国土地理院国土電子Webより作成）

のものではなく、形態の類似については同様の機能を有するためと想定する（内田2016,p175）。

以上、北陸地域出土の「九州型石錘」は出土地は交通の要衝となる立地が多いなど、外洋航海に長じた海人集団のイメージと結び付けやすかった（第1図）。一方、出土した遺構は包含層や溝など時期幅を広く見積もるの必要があり、古墳時代以降のものが多くを占める。さらに、玄界灘沿岸地域では弥生時代中期後半以降の鉄製工具の導入による加工技術の発達により多種多様な石錘が創出されるが（大庭2023）、北陸地域のは製作技術の観点からの検討が不十分であるといえる。

このように、形態の類似性のみがピックアップされている現状のため、石材、色調、製作・加工技術や使用痕からの機能の復元など、実見による考古学的な情報に基づいた実態把握が求められる。

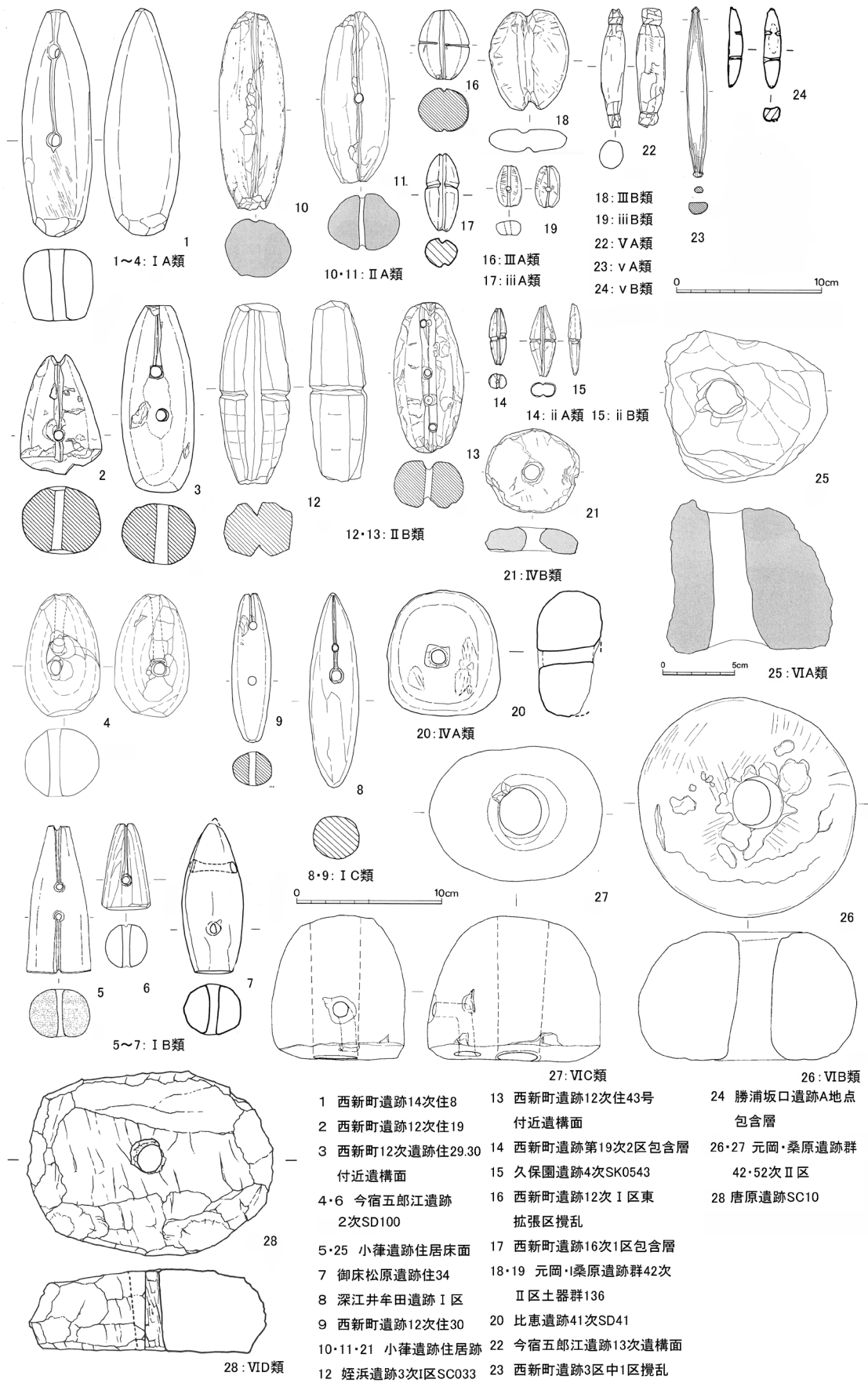
次章からは、出土事例や実見したものは限られているが、可能な限り実証的な検討を行う。

## 2 石錘の分類（第2図）

本稿における九州型石錘の分類は、筆者が別稿にて既に示しているものを用いるが（大庭2023）、下條信行氏の分類（下條1984）との対照しながら、以下でその概要を簡単に示す。

I類は底部が幅広の水滴形を呈し、底部形態により細分される。底部が丸みを持つものをIA類（下條の大形A I型：第2図1～4）、底部に面を持ち、かつ水平であるものをIB類（下條の大形A II型：第2図5～7）、底部がとがるものをIC類とする（第1図8・9）。加えて、溝と孔の位置、数については、後述するII・III・V類石錘と同様、1孔のものを「あ」、2孔のものを「い」、それに加え上溝のものを「1」、全溝のものを「2」、長軸溝と短軸溝を併用するものを「3」とした。

II類は長楕円形の上下左右対称的な紡錘形をなすもので、長軸に溝を施すものを基本とする（下



第2図 玄界灘における九州型石錘分類図 (1/4) (大庭 2023 より引用)



條の大形B型：第2図10～15)。II類ではその重量で概ねその用途を分けることが可能で、特に50g以下の小型品の多くは釣用錘とみられることから、重量が50g以下の小型のものをii類とする。また体部断面が円形に近いものを「A」、体部断面が矩形に近い扁平なものを「B」とした。

III類は体部が丸い紡錘形で、体部断面は円形である(第2図16～19)。IV類は紡錘車状をなすものである(第2図20・21)。V類は細長い棒状で両端に突起や溝、孔を持つもので、細長い体部の両端に紐掛け用の突起を作り出さないしは溝を作り出すものをVA類(第2図22・23)、端部以外の体部に溝を持つものをVB類(第2図24)、両端に孔を持つものをVC類とした。VI類は中央に円形孔を持つ半球形または環状の超大型品で(第2図25～28)、VII類は打欠石錘である。

なお、下條氏が九州型石錘として規定したものは、I～V類にあたる(下條1984)。

### 3 北陸地域の「九州型石錘」について

北陸地域の「九州型石錘」については、今回資料調査を行った石川県2遺跡、富山県1遺跡、新潟県3遺跡と、本研究以前に資料調査を実施した福井県1遺跡、石川県3遺跡の「九州型石錘」について詳しくみている。

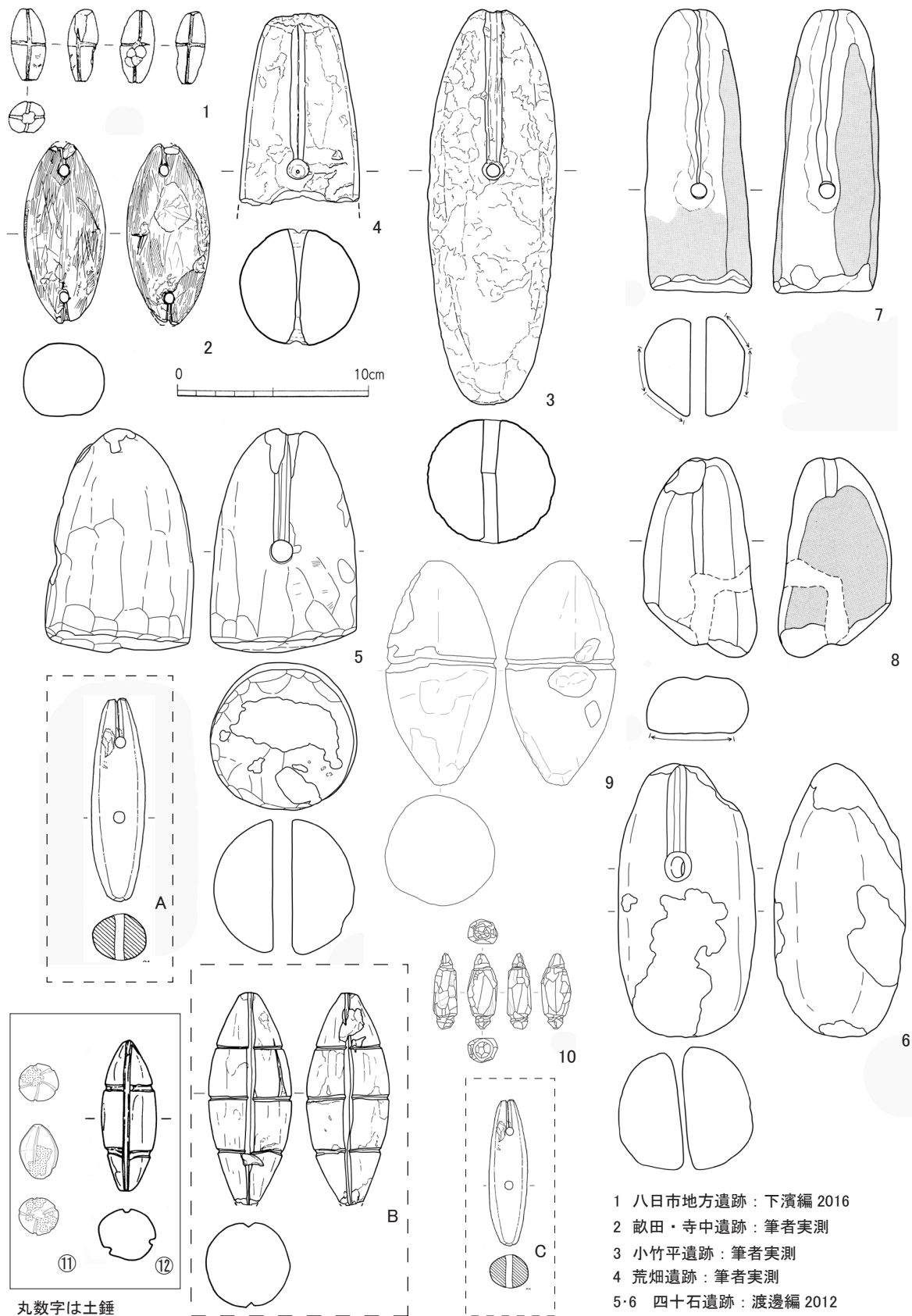
#### (1) 八日市地方遺跡

石川県小松市八日市地方遺跡は、梯川とその支流の合流地点付近の沖積低地の浜堤列上に立地する。遺跡では多重環濠で囲まれた弥生時代中期を中心とする掘立柱建物、平地建物、環濠、方形周溝墓群などが発見され、弥生時代中期の北陸では最大規模を誇る大規模環濠集落と評価される。また多量の未製品を含む木製品、遺跡周辺の菩提・滝ヶ原産碧玉や糸魚川産ヒスイを用いた玉作関連資料などの多様な手工業生産、加えて伊勢湾岸地域、琵琶湖周辺、畿内北部、瀬戸内、信州北部など各地に由来する土器から、当該期、広範囲の地域間交流拠点であったことが判明している。

今回、八日市地方遺跡出土の筆者分類ii B-3類の有溝石錘(福海他2003)、iii A-1類の有溝土錘(下濱編2016)各1点の資料調査を実施した。なお、次山淳氏はこの有溝石錘が山陰地域を中心に展開することから、このタイプの日本海沿岸地域における分布・展開状況が玄界灘沿岸地域の九州型石錘との関係を検討する上で重要と指摘する(次山2022.p101)。

石錘は、弥生時代中期中葉の包含層から出土した。法量が長さ3.7cm、幅1.8cm、厚さ1.7cmの長楕円形で、断面はやや歪な楕円形を呈する(第3図1)。表面は丁寧に研磨するが、鉄製工具の切削や面加工の痕跡は確認できない。両端部は平坦に研磨するが、端部まで溝が伸びていないことから、施溝後に両端部を平坦に加工したとみられる。溝幅は幅1mm、深さ0.3mm程度と浅く、かつ真っすぐではない。一方、短軸溝は所々途切れ、全周はしていない。溝及び表面は若干摩滅しているため、使用品と思われる。材質は砂岩で、重さは8.6g。色調はオリーブ色を呈する。

弥生時代中期中葉の八日市地方遺跡は、遺跡で生産した菩提・滝ヶ原産碧玉管玉やヒスイ製勾玉などの玉製品が日本海を通じて広範囲に流通すること、鉄製ヤリガンナ等の出土から状況的には玄界灘沿岸地域のものとの関係が想定される。しかし、本石錘には玄界灘沿岸地域のような鉄製工具による連続した切削痕(第2図22・第3図C)や面加工(第2図12)がないこと、溝断面はV字形ではなく、かつ真っすぐではないこと、先端まで溝が回らないこと、かつ時期は土器の併行関係の問題はあるが、特徴は山陰系有溝石錘(乗松2013,p48)に近いが、その出現期の弥生時代中期後葉(乗松2007・2013)よりも時期が先行する。そのため当地で弥生時代中期中葉以前に遡る石



丸数字は土錘

【土錘】

- ⑪: 八日市地方遺跡：下濱編 2016
- ⑫: 平面梯川遺跡：垣内ほか 2000

【参考資料】

- A・C: 西新町遺跡：重藤編 2000
- B: 妻木晩田遺跡：筆者実測

- 1 八日市地方遺跡：下濱編 2016
- 2 畝田・寺中遺跡：筆者実測
- 3 小竹平遺跡：筆者実測
- 4 荒畑遺跡：筆者実測
- 5・6 四十石遺跡：渡邊編 2012
- 7・8 緒立 C 遺跡：渡邊編 1994
- 9・10 五千石遺跡：加藤他 2011

第3図 北陸地域における「九州型石錘」① (1/3)

錘は存在しないことから、玄界灘沿岸地域からの影響は否定できないが、この1例のみで玄界灘沿岸地域の系譜と捉えることは現状では難しい。ただし、時期の問題を除けば、山陰地域の妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡ではこの類の石錘が認められるため、山陰地域との関係性は指摘できる。

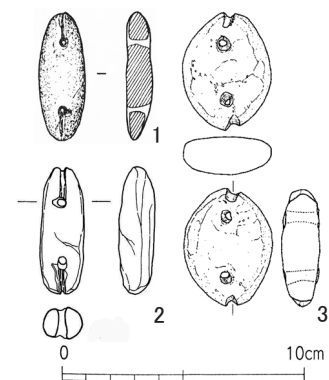
一方、有溝土錘は詳細な時期は絞ることができない。長さ2.8 cm、幅1.9 cmのラグビーボール状を呈し、断面は円形である(第3図11)。縦方向の幅1.5 cm、深さ0.3 mmの溝5条をヘラ工具で刻み、端部までは溝がまわらない。重さは9.1 gを測り、色は褐灰色を呈する。縦に3条以上溝を刻むものは、山陰地域の有溝石錘に類例が確認できる。

なお、有溝土錘であるが、弥生時代後期前半～後半の石川県小松市平面梯川遺跡3次北調査区包含層からii A-3類の有溝土錘1点が出土する(第3図12、垣内他2000)。長軸3条、短軸2条で、鳥取県米子市妻木晩田遺跡出土有溝石錘に類似することから(第3図B)、山陰系有溝石錘をモデルに土製で在地生産したものの可能性がある。法量は長さ7.7 cm、幅2.9 cm、重さ49.3 gを測る。

## (2) 畝田・寺中遺跡

石川県金沢市畝田・寺中遺跡は河北潟と海を繋ぐ犀川・大野川沿いの沖積微高地上に立地する。畝田・寺中遺跡は、弥生時代中期から施溝分割技法による緑色凝灰岩の管玉生産が行われた拠点集落で、古墳時代前期になると腕輪形をはじめとする碧玉製品が生産される。なお、第5図2も本遺跡出土で、古墳時代前期に属するとされるが、後述する形態・大きさ・材質・調整方法の検討から、弥生～古墳時代前期の石錘ではないと判断した。なお、本遺跡出土石錘は以前に資料調査したものであり、詳細は別稿を用意しているため、概要のみ示す。

古墳時代前期に位置づけられるC1区SD6からII A-1-い類石錘が1点出土した(第3図2:立原編2006)。両端部に径5 cmの穿孔を施し、両端部まで幅2.5 cm前後のV字溝を繋げる。両端部に欠損が認められることから、両端部に力が加わっており、使用品と判断される。体部加工はまずは面加工を行い、その後一部に長さ2.5 mm、幅2.5 mm前後の連続した鉄製工具による切削を行っている。最終的にやや粗目の砥石で面の角を取るように研磨する。法量は長さ9.3 cm、幅4.15 cm、厚さ3.7 cm、重さ203.4 g、石材は片岩系の蛇紋岩で、色調は風化により表面はオリーブ黒色になっているが、色調は明緑灰色である。



1 宮の前遺跡 E 地点：酒井 1970  
2 大塚遺跡第 18 次：榎本 2015  
3 板付遺跡 H-5 地点：沢他 1977

第4図 畝田・寺中遺跡  
関係石錘・土錘(1/3)

本例は既に報告書で搬入品の可能性が指摘されている通り(立原2006,p228)、玄界灘沿岸地域の九州型石錘と同様、孔と溝がセットであること、紡錘形、面加工、切削加工など玄界灘沿岸地域の製作技法と多くの共通点が認められ、北陸地域では玄界灘沿岸地域の九州型石錘との直接的な関係を推測できる唯一の事例である。なお、1点のみの出土と使用痕から、釣用錘と推測される。

本例の類似例として、いずれも法量が小さいが、ii A-3類石錘が宮の前E遺跡(重量14.1g、弥生時代後期後半)(第4図1)、大塚遺跡18次SX011(重量19.5g、弥生時代後期終末)(第4図2)がある。さらに土錘ではあるが、最も形態に近いものは弥生時代中期中頃～後期前半の福岡市板付遺跡H-5地点第1号溝出土土錘がある(第4図3)。この土錘は長さ4.9 cm、幅3.5 cm、厚さ1.5 cm、重さ26.1 gと、



大きさは畝田・寺中遺跡例の約半分、断面は扁平という違いがある。一方、孔径は4 mm、溝幅は4 mmとほぼ同様である。1点のみの出土であり、釣用錘と推測される。

### (3) 小竹平遺跡

石川県中能登町小竹平遺跡は、邑知地溝帯中央の扇状地に立地する(山本 1985)。石錘は包含層出土で、弥生時代後期後半～古墳時代中期、8世紀後半段階の土器が目立ち、時期の特定は難しい。石錘は法量が長さ20.3 cm、幅6.5 cm、厚さ6.3 cm、重量1,070 gを測る、大型かつ完形品で(第3図3)、管見の限りでは北陸地域のI類石錘の中で唯一の完形品である。体部中央やや上寄りに径7 mmの孔を両面穿孔により施す。孔から上半部を巡る1条の長軸溝は幅8 mm、深さ3 mm程度の断面凹状を呈し、上端部まで溝を刻む。体部表面は全面凹凸が顕著であるが、一部表面を研磨しているため、本来は全面研磨していたものの、その後の使用で表面に凹凸が生じており、特に図の裏面は凹凸が顕著である。下端部は窪んでいるが、使用の際に生じた痕跡と考えられる。溝内には顕著な使用痕はない。以上のことから、下端部の窪みと裏面の凹凸は使用時に海底を曳きずった際に生じた使用痕と推測される。材質は砂岩製で、色は灰色を呈する。

溝の形状、材質、大きさ、表面の状況は、福井県小浜市岡津製塩遺跡出土石錘(第6図1)に類似し、同様の使用状況が想定される。

### (4) 荒畑遺跡

富山県射水市荒畑遺跡は、縄文時代後期から中世にいたる複合遺跡で、溝SD02から石錘が1点出土した(久々 1991)。報告書では石錘の時期について溝の共伴資料から中世に時期比定するが、その後報告者の久々忠義氏は玄界灘沿岸地域の九州型石錘の年代観を引用し、弥生時代後期～古墳時代の石錘である可能性を示している(久々 1992)。

石錘の下半部は欠失するが、長さ9.8 cm以上、幅6.1 cm以上、厚さ6 cm、重さ425.4g以上を測る(第3図4)。断面は正円で、中央に径1.5 mmの極めて細い孔を両面から回転穿孔により施す。孔断面は上面径1 cmであるが、そこから漏斗状に中央部に向かって細くなることや、裏側を中心に穿孔時の粗い稜が残る。孔から上端部に向かって幅7 mm、深さ2 mmの断面U形状の溝が1条刻まれる。溝内には工具痕は残っておらず、摩滅も顕著ではない。上端部は敲打したままである。

石錘表面は丁寧に研磨されるものの、表面側の溝周囲は使用により荒れ、若干凹凸がみられるが、海底を曳きづって使用したほどの使用痕ではない。石材は溶結凝灰岩で、色は灰オリーブ色である。

本石錘の特徴は、孔径が1.5 mmほど極めて細いことにある。先の小竹平遺跡の石錘では孔径は7 mmであり、1 kg弱に復元できる本石錘の孔に1.5 mm以下の紐糸を通して海中で垂下すると、細くて切れないかなり丈夫な紐糸が必要になる。溝内にはあまり摩滅が認められないが、下半部の欠損と、孔内が摩滅しているため、使用品であると判断される。

本例がどのような漁法で用いられたのかという使用状況の復元は難しく、かつ弥生～古墳時代前期の紐糸でこの重さの石錘を用いることができたのか、疑問がある。

### (5) 四十石遺跡

新潟市四十石遺跡は、砂丘と西川に挟まれた埋没砂丘上に立地し、縄文時代後期～中世にかけて

遺跡が営まれるが、古墳時代と古代が遺跡の主体となる（渡邊編 2012）。

第3図5は筆者分類のI B-あ-1類石錘である。下端面には自然面が残り、下端部以外の表面に比べ加工が中途半端であるため、下半部が欠損したものを後に平坦に加工した可能性がある。表面は鉄製工具で幅1.5cm前後の幅広の切削を行い、その後粗めの研磨を施す。石材は凝灰岩の軟らかいものを用い、溝周囲に摩滅が若干認められる。孔は径10mm、溝は幅5mm、深さ3mmで、溝の断面は逆コの字状を呈する。孔内と溝は使用によりやや摩滅する。法量は長さは11.5cm、幅7.5cm、厚さ7.6cm、重さは491.5gを測る。石材の色は灰白色を呈する。

第3図6は筆者分類のI C-あ-1類である。5とは異なり、石材の選択や整形、加工等、全体的に粗雑な印象を受ける。先端部を欠損し、かつその部分には顕著な被熱を受ける。石材は石英安山岩で、石材の質から加工痕は残りにくいものの、幅7mm程度の鉄製工具による加工痕が一部残ることから、側面を中心に一部は鉄製工具で加工後、研磨したと想定できる。法量は長さ14cm以上、幅7.0cm、厚さ6.7cm、重量709.1gを測る。また下半部の表面のワレは、曳きずられた際の痕跡と考えられる。孔は使用により上面が1.6×1.2cmの縦長を呈し、溝内は摩滅することから、かなり使用されていると判断される。孔径は6mmで、溝幅は6mm、深さ2.5mmと浅く、断面はU字形を呈する。色は暗褐灰色を呈する。

石錘はいずれも縄文時代～奈良・平安時代の遺物を含む包含層V層から出土し、年代の確定は難しい。また5は形態的には玄界灘沿岸地域のI B類石錘（第1図5～7）、6もI C類そのものであるが、法量が玄界灘のものよりかなり大きく、石材、切削幅、調整、溝の断面形、色調など異なる点も多く、玄界灘沿岸地域と全く同様の機能で用いられたとはいえないと考えている。

## （6）緒立C遺跡

新潟市緒立C遺跡は、信濃川下流の低地に埋没する砂丘上に立地する。遺跡は縄文時代晩期～弥生時代、古墳時代前期、古代、中世にわたるが、主体は古墳時代前期と奈良・平安時代である。

7はD 3-14グリッドの包含層出土の筆者分類のI-あ-1類石錘で（第3図7）、相伴土器からの時期決定は難しい（渡邊編 1994）。下半部は欠損するが、上部がややすぼまる縦長長方形を呈し、現状で長さ14.5cm以上、幅5.3cm、厚さ5.1cm、重さは610.5g以上を測る。体部は鉄製工具により大きく切削され、多角形加工されるが、孔・溝が彫られた面は粗い研磨のみにとどめている。上端部は敲打加工のみで研磨は施していない。

孔径は8mmで、両面穿孔で施されるが、孔周囲は両面とも使用よりかなり荒れており、特に下方向に曳かれた痕跡がある。溝は幅2～6mm、深さ最大2mm、断面はU字形と細くかつ真っすぐに施されていないが、幅2mmの一段深く施溝された箇所があるため、幅2mm程度の細い紐糸を使用した可能性があり、釣用錘と思われる。また側面には若干擦れた痕跡が認められる。材質は安山岩で、色は明オリーブ灰～青灰色を呈する。多角形の面加工は弥生～古墳時代前期の九州型石錘の特徴と考えているが、本例の切削による面は幅が広く、形態もかなり縦長長方形で、法量も大きい。

8はC 8-14グリッド包含層出土で（第3図8）、1と同様、相伴土器からの時期決定は難しい。法量は長さ10.2cm以上、幅5.5cm以上、厚さ2.9cm以上、重さは187.3g以上で、大きく欠損するため、全容は不明である。溝幅は4mmであるが、深さは1.5mmと非常に浅く、断面はU字形である。砂岩製で、色は灰オリーブを呈する。



### (7) 五千石遺跡

長岡市五千石遺跡は、新潟県中央部、信濃川によって形成された自然堤防上に立地する。遺跡は縄文時代晩期、弥生時代中期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期と断続的に集落が営まれるが、古墳時代前期と後期が遺跡の主体となる（加藤他 2011）。

古墳時代前期中頃～後半の3区竪穴住居 SI03 では、緑色凝灰岩を用いた管玉製作関連資料とそれと共存が予測される鍛冶遺構及び平坦な底面を持つ断面が蒲鉾形の鞆羽口が出土している。出土した小型の蒲鉾形の鞆羽口の存在から、鉄器生産技術は博多遺跡群からの日本海沿岸ルートないしは纏向遺跡を経由する畿内ルートで伝播したことが想定されるが、緑色凝灰岩製管玉生産は北陸南西部管玉生産の技術系譜上にあり、島根県古志本郷遺跡でも蒲鉾形の羽口がみられることから（村上 2023,p486）、鉄器生産技術は日本海沿岸ルートで伝播した可能性がある。

出土した石錘2点はいずれも3区遺構外からの出土であるが、相伴土器は古墳時代前期中頃～後半が主体となる。

第3図9は3区27X22包含層IV層出土のラグビーボール形を呈するII A-2類石錘で、下端部が若干欠損する以外は完形に近い。表面には鉄製工具による幅1cm前後の面加工のち丁寧に研磨される。短軸方向に1条刻まれた溝は幅4mm、深さ1.5mmの浅いV字形を呈し、溝底部に工具痕も若干残る。体部、溝内とも使用による顕著な摩滅はない。長さ11.6cm、幅・厚さ5.7cm、重量328.6gを測る。材質は流紋岩質凝灰岩で、色調は灰白色である。

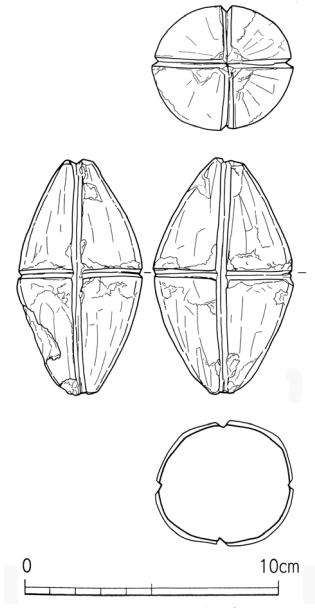
第3図10は3区25Y15包含層IV層出土の両端に抉りを施すv A類石錘である。表面全体を鉄製工具で丁寧に切削するが、切削の長さが玄界灘沿岸地域のものは細かく連続した切削であるが、本例は長さが長い。またしっかり稜が残っているため、ほぼ使用していないとみられる。溝は上側が幅2mm、下側が幅4.5mmと下側が広い。法量は長さ3.9cm、幅1.5cm、厚さ1.3cm、重さ5.89gを測る。材質は流紋岩質凝灰岩で、色は灰白色である。

いずれも出土層位から古墳時代前期後半と考えられるが、9のラグビーボール形の形態は山陰地域でみられるが、それに短軸溝を施す事例は西川津遺跡の長軸溝+短軸溝の存在など（第5図）少数みられるのみである。特に短軸溝のみとなる本例は横位で用いられたと想定できるため、長軸溝に紐糸を結び垂下して用いる玄界灘沿岸地域と共通する漁法では用いられてないと考えており、玄界灘沿岸地域との直接的な系譜関係にあるかは可能性を指摘するのみに留めておきたい。

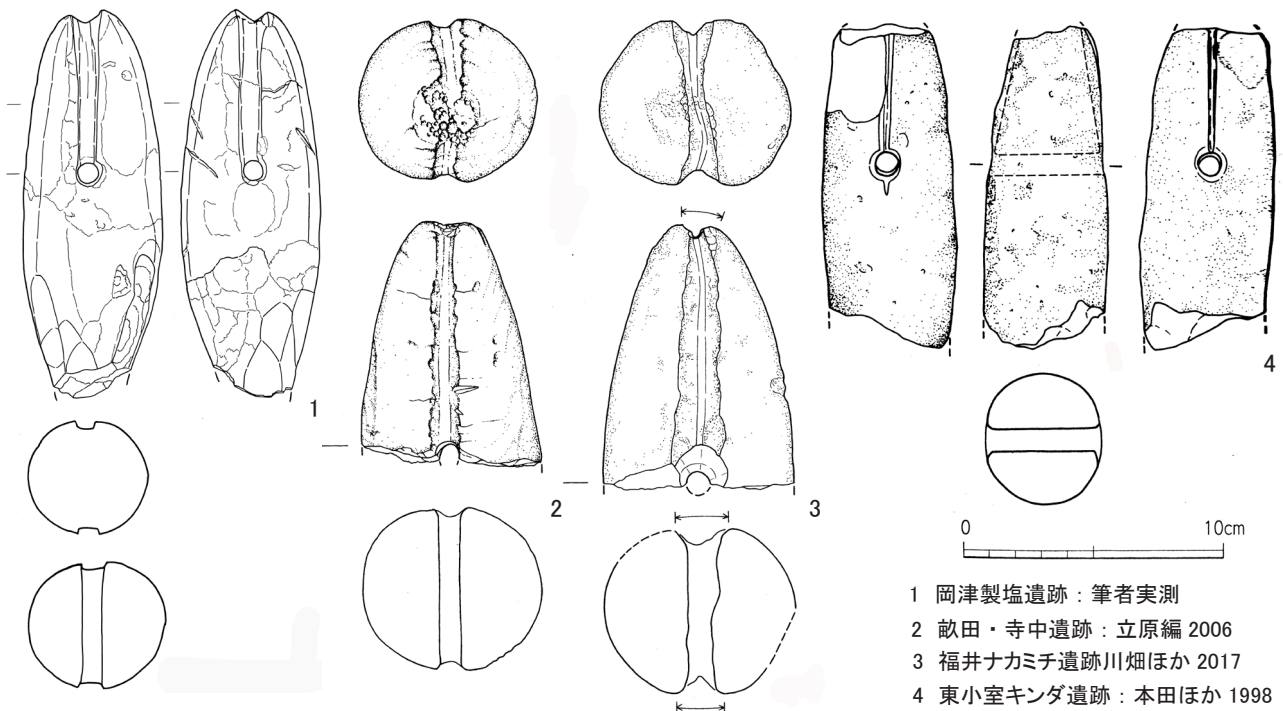
10についても、古墳時代に属するとされる富山県糸魚川市田伏玉作遺跡で古墳時代に属するとされるv A類1点があるが（久田 2000,p54）、その他は玄界灘沿岸地域のみ分布するタイプである。なお、玄界灘沿岸地域のV類は古墳時代～古代を通して認められる器種であり、今後確実な年代を押さえることのできる資料からの検討が必要である。このことから、v A類は山陰地域での出土例がない現状では、玄界灘沿岸地域との直接的な関係の判断は難しい。

### (8) その他北陸地域の石錘

岡津製塩遺跡（第6図1、7・8世紀）、畝田・寺中遺跡（第6図2、古墳時代前期?）、石川県



第5図 西川津遺跡出土II A-3類石錘(1/3、大庭 2023)



第6図 北陸地域における「九州型石錘」② (1/3)

志賀町福井ナカミチ遺跡 (第6図3、8世紀後半～末)、志賀町東小室キンダ遺跡 (第6図4、古墳時代前期～後期) の「九州型石錘」I類は以前の資料調査結果を簡単に取り上げる。

いずれも体部には細かい凹凸が残り、面加工の仕上げ砥等による細かい仕上げ研磨は施されていない。溝もV字溝ではなく浅いもので、弥生・古墳時代のI類石錘よりかなり大きく、重量も岡津製塩遺跡・東小室キンダ遺跡が600g程度、福井ナカミチ遺跡では1kgを超える程度に復元される。この重量では捕獲した魚の重量も加えると、弥生・古墳時代前期の紐糸では重すぎて紐糸が耐えられなかった可能性がある。色調も灰色系で、材質も砂岩系が多く、水中で目立つものではない。

#### 4 北陸地域の「九州型石錘」、特にI類石錘について

以上、今回検討した北陸地域の「九州型石錘」は、共伴資料、形態、法量等から玄界灘沿岸地域で九州型石錘が盛行する弥生時代中期～古墳時代前期に位置づけられるものは、八日市地方遺跡のii B - 3類1点、畝田・寺中遺跡のII A - 1 - い類1点、五千石遺跡のII A - 2類1点のみである。

北陸地域で出土したI類石錘は、玄界灘沿岸地域のI類石錘と形態の類似するが、法量や重量が少なくとも500g以上と大きく、溝断面はV字形ではない。調整においても、玄界灘沿岸地域では弥生時代中期後半から鉄器の普及・利用も顕著になったことが、鉄製工具による連続した切削痕から判明するが、製作技術は石材の質、素材に対応して用いられるということは考慮すべきであるものの、北陸地域のI類石錘にはその痕跡はほぼ見られない。さらに、最終的な仕上げが敲打の粗い研磨のみであり、玄界灘のように海中で光り輝く位丁寧に研磨していないこと、材質も砂岩などが主体で、色調も灰色系が多く、海中における使用場面や効果という面で異なる点が多く、玄界灘沿岸地域のI類石錘とは形態が類似すること以外の共通要素は少ないといえる。

確実に古代以降に属するI類石錘の存在については、中世では博多遺跡群、西海市膝行神貝塚では滑石製石鍋を再加工したもの、近世では神戸市兵庫津遺跡、近代の漁業誌にみられる天秤釣の錘、

現代の沖縄県粟国島の事例（内田 2016,p172）など、I 類石錘の時期や地域が弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域に限定されず列島西部の広範囲に及ぶことが明らかになっている（大庭 2023）。これらの古墳時代以降の I 類石錘は、弥生～古墳時代前期における玄界灘沿岸地域の I 類石錘と形態の類似性は確認できるが、時期や製作技法、大きさの違いから、系譜的には繋がらないと判断できる。

以上、北陸地域における I 類石錘は、弥生～古墳時代の玄界灘沿岸地域の I 類石錘との釣用錘としての機能の共通性から生じた「他人の空似」である可能性があり、いち早く海中の目標の深さまで垂下することができる I 類石錘は、時代を問わず製作され、使用されたのではなかろうか。

次山氏は、北陸地域の I 類石錘は下半部が欠損しているものが多く、割れ方も似ていると指摘する（次山 2022,p101）。加えて、石材も密度が高い砂岩を多用し、500 g 以上の大型品が多いことは、操業場所が沖合かつ潮流の速さ等漁場の環境に影響されている可能性もあり、多くが完形品に近い形で出土する玄界灘沿岸地域の I 類石錘と対象魚種が異なることを示している。底魚のメバルを対象とした粟国島の事例から（内田 2016,p172）、海底の底魚を対象にしていた可能性が推測できる。

北陸地域における I 類石錘は共伴資料から 8 世紀前後の古代の所産とみられるが、出土数も少なく、分布もまとまっていないため、使用した漁法や展開の様相、相互の関係性は不明であるが、作業効率に直結する技術的創意工夫により優れた漁具・漁法は、より容易に地域の垣根を跳び越えていったのかもしれない。このように、出土遺構や遺物で時期を決定できず、かつ包含層や溝等で中世以降の遺物が混入し、500 g を超える I 類石錘は、形態のみで弥生～古墳時代の九州型石錘の I 類石錘とすることは今後注意を要する。

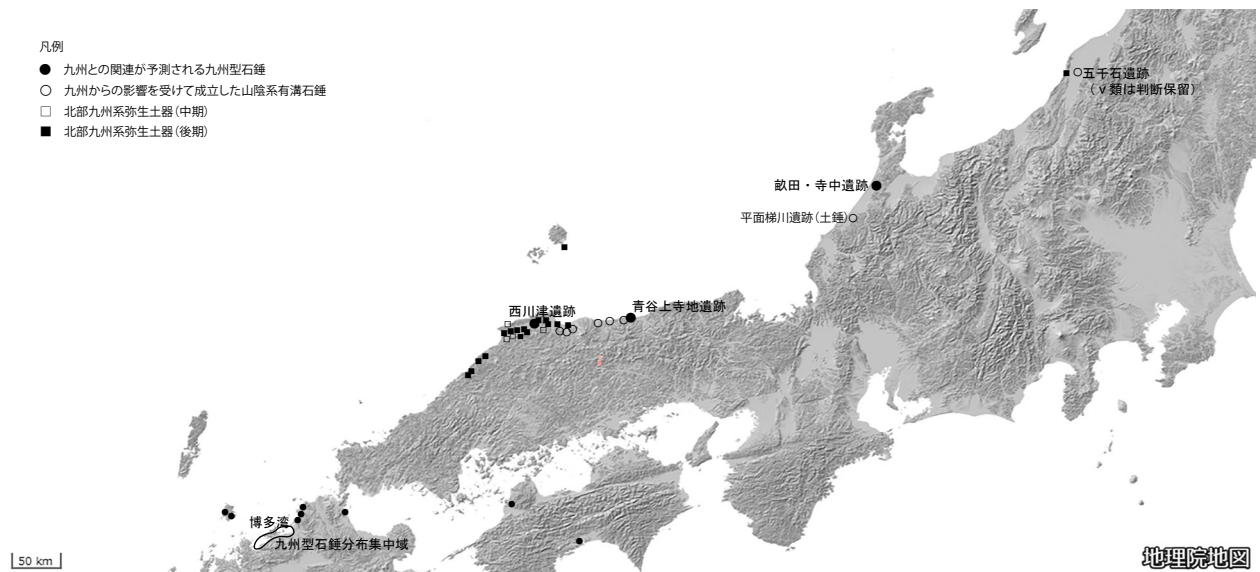
以上、弥生～古墳時代において玄界灘沿岸地域と北陸地域との直接的な地域間関係は、「九州型石錘」I 類石錘の分布からは直接的には追うことはできない。そのため、今後九州型石錘という名称自体は誤解が生じることから、有溝・有孔石錘などの名称を用いるなど、今後北陸地域において「九州型石錘」の名称の使用は避けるべきと考える。

## まとめ

弥生時代中期後半～古墳時代前期、社会情勢や生産技術・流通関係の急激な変化による様々なレベルでの広域にわたる活発な地域間交流が認められる中で、北陸地域の人々が玄界灘の海人・漁法と接触した物的証拠として「九州型石錘」が考えられてきた。今回、資料調査より抽出できた共伴資料からの年代、製作技術、法量等の考古学的な情報から、北陸出土の「九州型石錘」を評価した結果、資料調査で取り上げた中で玄界灘沿岸地域との直接的な関係性が窺える資料としては、畝田・寺中遺跡例、可能性があるものとしては五千石遺跡例の計 2 点で、八日市地方遺跡例や五千石遺跡の v A 類は現時点では直接的な系譜関係は難しいと判断した。

ちなみに、漁法の伝播は漁具のみでは得られないものであることから、実際に作業の過程に立ち会って技術指導を受けないと困難である。八日市地方遺跡、平面梯川遺跡での石から土への材質転換の可能性については、山陰で使用される漁具を見て、石材の入手が困難であることからそのまま土製で再現した可能性や石よりも土の方が容易に製作できるなどが理由と推測される。この場合はリレー式の伝播形態が想定できる。一方、畝田・寺中遺跡例と最も類似するものが板付遺跡の土錘であることについては、玄界灘沿岸では本来、このタイプと同じ石製が存在していた可能性がある。この場合はダイレクトな伝播形態であった可能性があり、それが形態のみならず、石材や製作技法





第7図 日本海沿岸における九州型石錘と北部九州系土器の出土分布図（縮尺任意）  
（国土地理院国土電子 Web より作成）

等の要素に現れている可能性がある。なお、博多湾沿岸地域においては、山陰系・北近畿系土器が主体の日本海沿岸系土器が弥生時代後期以降、出土数が増加するが、特に福岡市唐原遺跡では後期後半以降の煮沸用の甕が主体とする山陰系土器と北近畿系土器が竪穴住居跡からまとまって出土しており、日本海沿岸地域からの日常生活容器を伴った小規模な集団の移動・一時滞在の痕跡を示しているものと理解されている（森本 2013,p61）。よって、北陸地域の人々が直接博多湾・山陰に向いて、技術習得した可能性があり、このような中で九州型石錘が伝播した可能性を考えている。

それ以外の I 類石錘は、法量・調整・色調・共伴土器からの年代観などから、玄界灘沿岸地域の I 類石錘とは直接的な系譜関係にないと判断した。ただし、弥生～古墳時代前期、北陸地域では漁具の出土が玄界灘と比べかなり少なく、地域内での動向が明らかではないという現状があり、今後調査が進展すれば、畝田・寺中遺跡例のような直接的な関係を示す事例がでてくる可能性がある。

また法量がかなり大きい I 類石錘の想定される使用場面も、使用痕から多くが海底で曳きずられたみられるものの、出土例が少なくかつ分布もまとまらないこと、海域環境や民俗例等との比較研究が今回不十分であるため、可能性の提示にとどまってしまっている。今後の課題にしたい。

弥生時代、北部九州と北陸地域とは墳墓に副葬された豊富な鉄製武器や長野県柳沢遺跡の銅戈、花卉高坏等の木製品の存在などから、瀬戸内地域や太平洋沿岸地域に比較して、関係性を示す資料が量的に豊富で、直接的な交流があった可能性が多くの先行研究で指摘されてきた。

弥生時代後期には日本海沿岸地域の広い範囲で、墳墓への豊富な鉄製武器の副葬や各種玉生産技術向上に伴う鉄素材と鍛冶技術の導入という技術革新が起り、長距離の地域間交流が活発化する。特に弥生時代後期終末～古墳時代前期前半にかけて高温による鉄器生産技術が玄界灘沿岸地域を発信元として北陸地域に伝わり、土器等各種器物の類似性も高まる状況の中で、ダイレクトな地域間関係や交易関係を示す具体的な資料として「九州型石錘」が取り上げられてきた。今回の検討結果から、両地域の海人同士による長距離の情報交換や技術供与という関係は、畝田・寺中遺跡例から存在した可能性があるとしかたえず、積極的な位置づけは難しい。

この結論は、島根県隠岐島沖や新潟県開運橋遺跡などで、弥生時代後期後半前後の北部九州系複

合口縁壺や大型甕が出土するが（第7図）、煮沸用の甕はごく少量で、中身が外に出にくい器形の複合口縁壺や甕が主体である。これらは、航海に必要な物資や交易を納めた容器、運搬用コンテナとして用いられたと想定されることから（常松 2001）、搬入土器も直接的な人の動きの証拠となりにくい現状と石錘の在り方は整合し、モノから人の動きを復元するのは現状では難しい。

弥生時代後期～古墳時代前期、日本海沿岸地域の諸集団は北部九州の諸集団との関係をさらに深め、鉄器を中心とする交易ネットワークを基盤とした日本海沿岸の広域的な地域圏が確立したと捉えられるが、玄界灘沿岸地域からの直接的な漁労技術の導入までは基本的には至っておらず、広域交流の基層に海人の積極的な関与を想定することができない。日本海沿岸地域の人々が製品や素材の輸入よりも鍛冶技術習得のため、博多湾に向かうことで間断ない技術的向上を図っていたなど、相互の地域間交流の在り方が大きく影響した可能性を考えている。

九州型石錘の検討を通して、日本海を渡る技術と体力、知識、経験、時には商才も兼ね備えた海人集団の姿を追うという目論見は残念ながら外れた。ただし、様々な物資、情報、技術が行き交った列島東西を結び基幹ルートである日本海ルートにおける交易活動は、弥生～古墳時代前期の社会構造を検討する上で、非常に重要である。今後は鉄器、土器、木器、玉類だけではなく、他の要素を含めて広域的な地域間関係について実証的な研究により、担い手となった集団の姿を追求していく必要がある。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、以下の機関・個人に御協力いただいた。記して感謝申し上げたい。

相澤裕子・加藤由美子・小林嵩・立原秀明・端猛・林大智・久田正弘・福永徹・町田尚美・横幕真・石川県埋蔵文化財センター・小松市埋蔵文化財センター・富山県埋蔵文化財センター・長岡市立科学博物館 中能登町教育委員会・新潟市文化財センター

## 引用・参考文献

- 内田律雄 2016「九州型石錘についての覚書 - 下條分類 A I 型 - 涙摘形石錘の成立と展開 -」『海と山と里の考古学 - 山崎純男博士古稀記念論集 -』 山崎純男博士古稀記念論集編集委員会
- 垣本義嗣 2015『大塚遺跡 8』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1255 集 福岡市教育委員会
- 大庭孝夫 2021「九州型石錘の機能に関する一試論 - 福岡市西新町遺跡出土石錘を中心に -」『九州歴史資料館研究論集』 46 九州歴史資料館
- 大庭孝夫 2023『古代玄界灘における漁労活動の考古学的研究』九州歴史資料館
- 垣内光次郎・川畑誠・布尾幸恵・鈴木三男・能城修一 2000『小松市平面梯川遺跡 第 2・3 次発掘調査報告書』(財)石川県埋蔵文化財センター
- 加藤由美子・竹部祐介・南波守・松井奈緒子編 2011『五千石遺跡 1 区・3 区・4 区東地区・5 区』長岡市教育委員会
- 河合章行 2015『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 10 石器 (1)』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告 60 鳥取県埋蔵文化財センター
- 川畑誠・水田勝・端猛 2017『福井ナカミチ遺跡』石川県教育委員会・(公財)石川県埋蔵文化財センター
- 久々忠義 1991『富山県大島町荒畑遺跡発掘調査概要』大島町教育委員会
- 久々忠義 1992「大島町荒畑遺跡の九州型石錘」『大境』第 14 号 富山考古学会

- 小林嵩 2023『新潟県内の九州型石錘と若干の展望』新潟考古学談話会オンライン #24 発表資料
- 酒井仁夫 1970「宮の前遺跡 E 地点」『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第 1 集』福岡県教育委員会
- 沢皇臣・山口讓治・原俊一 1977『板付周辺遺跡洞査報告書 (4)』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 38 集 福岡市教育委員会
- 重藤輝行編 2000『西新町遺跡Ⅱ』福岡県文化財調査報告書第 157 集 福岡県教育委員会
- 下條信行 1984「弥生・古墳時代の九州型石錘について - 玄界灘海人の動向 -」『九州文化史研究所紀要』29 九州文化史研究所
- 下條信行 1989a「弥生時代の玄界灘海人の動向」『横山浩一先生退官記念論集 I』横山浩一先生退官記念事業会
- 下濱貴子編 2016『八日市地方遺跡Ⅱ 第 5 部土器・土製品編 第 6 部 自然科学分析編 第 7 部 補遺編』小松市教育委員会
- 杉山和徳 2023「東日本における弥生時代鍛冶遺構 古墳時代前期までの鉄器製作遺構を含めて」『季刊考古学』162 雄山閣
- 高尾浩司 2023「鉄器から見た弥生時代の交流」『先史・古代の日韓交流の様相 - 山陰を中心として -』第 50 回山陰考古学研究集会資料集 第 50 回山陰考古学研究集会事務局
- 立原秀明編 2006『畝田西遺跡群Ⅲ』石川県教育委員会 (助)石川県埋蔵文化財センター
- 次山淳 2022「研究史からみた本州中部日本海岸の「九州型石錘」」『高山流水 - 赤澤徳明氏退職記念論集 -』『高山流水 - 赤澤徳明氏退職記念論集 -』制作委員会 p95-105
- 常松幹雄 2001「土器からみた弥生時代の交易」『弥生時代の交易 - モノの動きとその担い手 -』第 49 回埋蔵文化財研究集会 発表要旨集 埋蔵文化財研究会
- 常松幹雄 2013「弥生土器の東漸」『弥生時代政治社会構造論』柳田康雄古稀記念論文集 雄山閣
- 中川寧 2023「北部九州と山陰の交流 - 土器と漆塗り木製品 -」『古墳出現期土器研究』第 10 号 古墳出現期土器研究会
- 乗松真也 2007「弥生時代の漁労」『海と弥生人』第 8 回弥生文化シンポジウム 島根県教育委員会
- 乗松真也 2013「山陰系有溝石錘からみた弥生時代後期の妻木晩田遺跡」『妻木晩田遺跡発掘調査研究年報 2013』鳥取県教育委員会
- 本田秀生・松山温代 1998『東小室ボガヤチ遺跡・東小室キンダ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター
- 久田正弘 2020「北陸地域の九州型石錘と山陰系甕形土器について」『石川県埋蔵文化財情報』第 43 号 公益財団法人石川県埋蔵文化財センター
- 福海貴子・橋本正博・宮田明 2003『八日市地方遺跡Ⅰ』小松市教育委員会
- 松本哲編 2000『妻木晩田遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅳ 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査団・大山町教育委員会
- 村上恭通 2022「古墳時代開始期における鍛冶技術の変革とその背景」『纏向学の最前線 - 桜井市纏向学研究センター設立 10 周年記念論集 -』桜井市纏向学研究センター
- 森川昌和・大森宏・上野晃・山口英一・田辺常博・入江文敏・畠中清隆・芝田寿朗・藤本香城 1980『岡津製塩遺跡 - 第 1 次・第 2 次発掘調査報告 -』小浜市教育委員会
- 森本幹彦 2013「博多湾岸域出土の日本海沿岸系土器 - 土器からみた弥生時代後期における日本海交流の様相 -」『みずほ別冊 弥生研究の群像』大和弥生文化の会
- 山本一信 1985『小竹ガラボ山古墳・小竹平遺跡』鹿島町埋蔵文化財調査報告第 1 集 鹿島町教育委員会
- 渡邊ますみ編 1994『緒立 C 遺跡』黒崎町教育委員会
- 渡邊ますみ編 2012『四十石遺跡 第 2 次調査』新潟市教育委員会